性暴力：話せるまでの 7 ステップ

どうして話すのが難しい？

1 様子をみる時期

子どもはおとなのことを信頼しているので、加害者のことも信用している。加害者は、性加害があたかも「新しい経験」「面白いこと」「遊び」であるかのように子どもに話し、だます。

2 何か変だと思いはじめる時期

子どもは何かおかしいと思い始める。この状況を止めたいけど、加害者の反応が怖かったり、誰かをがっかりさせたくなくて言うことができない。

3 秘密を押しつけられている時期

おとなは子どもが助けを求めず言いなりになるよう、あらゆる方法を使う。おとなは子どもに秘密を押しつけ、支配しようとする。

4 無力感で動けない時期

子どもは「忠誠葛藤」を抱える。子どもは加害者に対する拒否感と、加害者がたまに見せる優しさとの間で、葛藤に苦しむ。

5 状況に慣れ受け入れようと努力する時期

耐えられない状況があっても、それに慣れ、受け入れて生きようとする。

6 告白の時期

多くの場合、被害直後ではなく、時間が経ってから告白がされる。話すことは苦しみをともなう。けれど、子どもにとって決定的な瞬間となる。

7 告白の撤回と再告白の時期

告白によって引き起こされる周囲の動揺を見て、子どもはまわりの人たちからの愛情を失うのではないかと心配になることがある。心配のあまり告白の撤回をすることもある。再び勇気をふりしぼり、耐えた暴力について告白をすることもある。

L'ENFANT BLEU制作
日本語版制作・翻訳：安發明子、加藤剛